

## カーヴィングによる木彫制作と抽象彫刻の基礎考察

美術教育講座 佐々木昌夫

### 1. 授業の概要

本授業は、学校教育実践コース (美術教育専修) と造形芸術コースのそれぞれ3年次生を主な対象とした選択科目であり、彫刻分野におけるカーヴィング技法と抽象形態についての基礎学習を実技中心に行った。本年度の受講生は、学校教育実践コース (美術教育専修) 3年次生2名・4年次生1名、造形芸術コース3年次生7名・4年次生2名の合計12名であった。

#### ・授業目的 (両コース共通)

カーヴィング技法による抽象彫刻制作をとおして、彫刻の基本要素である素材・空間・動勢・量感について理解する。

#### ・到達目標 (両コース共通)

- ①抽象彫刻における素材・空間・動勢・量感について考察して、自身の彫刻観を構築する。
- ②カーヴィングの実践をとおして、基礎的な技術を習得するとともに、自身のイメージを超えた抽象形態を発見する。

#### ・関連するディプロマ・ポリシー

[学校教育実践コース (美術教育専修)]

教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野・教科等についての専門的知識を修得している。(知識・理解)

[造形芸術コース]

地域社会の造形芸術分野に関する文化振興に貢献するため、高度な技能と豊かな表現能力を身につけている。(技能・表現)

#### ・授業方法, 形態, 内容の概要 (両コース共通)

本授業で学習するカーヴィング技法では、電動チェーンソー・木工グラインダー等の電動工具やノコギリ・ノミ・大型カッター等の切削工具を使用した。それらの危険性を伴う工具の特質を考慮して、その使用方法や作業に適した服装等についての安全指導を一貫して行った。

授業の初めに、断面が15×15 (cm) の木材

(杉の角材) から、電動チェーンソーを使用して一人につき長さ30cm分を素材として切り取らせた。その角材から、「ねじれる」というテーマのもとに、カーヴィングによって抽象彫刻を制作することについて説明した。今回は、カーヴィングによる彫刻制作に初めて取り組む受講生がほとんどであるので、デッサン (平面) から立体の彫刻を想定することが不慣れではないかと懸念された。よって、デッサンで作品プランを練るのではなく、紙粘土でマケットを制作することとした。紙粘土は簡単に形を変化させられるため、最初から立体による制作プランの試行錯誤が可能となった。次にマケットを観察して角材の6面に下描きをし、明らかに削ってもよいと判断される箇所から削らせた。以後、「マケットの観察」・「素材への下描き」・「素材を削る」という一連の作業を何度も反復することによって、抽象形態を制作させた。本授業では、頭の中のイメージの具現化ではなく、イメージを超えた作品の探究が目的であるため、ある程度制作が進展した時点で、マケットを見ることを止めるよう指示した。

第8回授業で中間合評会を実施し、お互いの作品を鑑賞させて討議を重ね、以後の制作の方向性を検討させた。最後の授業でも同様に合評会を実施し、制作の総括とともに彫刻観の整理と言語化を図った。

### 2. アンケート結果

最後の授業で、以下のような選択方式と自由記述方式のアンケートを実施した。本年度は、受講生12名の全員から回答を得られた。(自由記述の回答は、簡略化して掲載した。)

#### 【授業の難易度】

[簡単]0人 [やや簡単]1人  
[ちょうどよい]9人 [少し難しい]1人  
[難しい]1人

#### 【授業のスピード】

[遅い]0人 [やや遅い]0人  
[ちょうどよい]10人 [少し速い]2人

[速い]0人

**【授業への関心】**

[全く関心がない]0人 [あまり関心がない]1人

[何とも言えない]0人 [関心がある]8人

[大変関心がある]3人

**【授業への満足度】**

[不満]0人 [少し不満]0人 [普通]3人

[満足]6人 [大変満足]3人

**【この授業で学んだと思うこと】**

- ・テーマに応じて抽象作品をつくること。

(6人)

- ・木の加工方法。(4人)
- ・木を削る感じと形の見せ方。
- ・木彫作品のねじれた形。
- ・木彫の体験。
- ・制作過程で作品の形が変化していくこと。
- ・言葉と美術作品の関係。
- ・木彫の基礎と美術の本質。

**【改善してほしい点、評価できる点】**

- ・木材の杉が使いにくかった。(3人)
- ・単調で長く感じた。
- ・早い段階で電動工具を使用したかった。
- ・もっと粗いサンドペーパーを使用したかった。
- ・多量の木くずが舞ったこと
- ・用具の使い方を分かりやすく指導してもらった。
- ・素材の木が程よい大きさだった。
- ・言葉をきっかけにして、抽象的な形を制作できたこと。
- ・技術的なことだけでなく、本質的なことまで学べたこと。(2人)

**【学習したことを、地域文化の活性化(美術・図工の指導、展覧会・ワークショップの実施等)につなげられるか?】**

- ・愛媛県産木材の特性を活かした作品づくり等につなげられる。
- ・作品鑑賞に役立つ。(2人)
- ・もう少し小さいサイズなら、学校現場の授業やワークショップにつなげられる。(3人)
- ・この授業で学んだことは、学校現場の授業で活かせると思う。
- ・年齢によって言葉のイメージは変化するので、幅広い年齢層が集まって取り組めば面白いと思う。
- ・子ども達の美術概念を変革させることにつなげられる。
- ・ノミ等を使用しなければ、子どもにもワー

クショップが開けるかもしれない。

- ・安全対策が大変なので、学校現場の授業やワークショップには適さない。
- ・地域文化の活性化にはつながらない。

**【制作過程で、自分のイメージとは異なる形や要素が現れたか?】**

- ・曲線にしたかった箇所が、少し直線まじりになった。
- ・曲線にしたかった箇所が、多少でこぼこがある形になった。
- ・当初はかわいらしいものができると思っていたが、いかつい作品になった。
- ・丸みがあり立ち上がった形にしたかったが、立ち上がりが少なかった。
- ・木の節が多く、削る方向や深さを変える必要があった。
- ・当初の柔らかいイメージは変わらなかったが、形のめりはりが少し強くなった。
- ・当初はなかった猫足の形が生まれた。
- ・予想以上にサイズが小さくなった。
- ・作品を修正していく過程で、アクセントとなる形が生まれた。
- ・おおよそイメージどおりになった。

**【最初のイメージと異なる作品に、どのような自己評価をしていますか?】**

- ・木目の模様が表面に出てきて、良いアクセントになった。
- ・木材を見ながら制作できたことにより、当初よりも動きのある形ができた。
- ・木の節が良いアクセントになった。
- ・形のめりはりが少し強くなり、カーブが見えるようになった箇所が良い。
- ・彫りすぎることで等により、自身の想像を超える形ができた。
- ・作品に一体感がないので、良い評価はできない。
- ・直線的になったので、少し流れが悪くなったように感じる。
- ・もっと軽やかなものにしたかったが、重くなってしまった。

**3. 地域社会を核とした教育と研究のつながり**

本授業で扱う彫刻を含めた全ての美術作品は、制作者個人のみから発せられる表現ではなく、制作者を取り巻く環境が様々な面で影響していることは言うまでもない。とりわけ自身が属する地域社会は、その主体形成に大きく関わるとともに作品の重要な要素を規

定している。その意味で彫刻もまた地域社会の産物であり、本授業でのカーヴィングの素材が石ではなく木であることも、愛媛県が有する豊かな森林資源と遠からず関係していると言えないだろうか。

アンケートで、12名中10名の受講生が本授業での彫刻制作は、何らかのかたちで地域文化の活性化につながれると答えている。地域社会から規定されながら、他方で個人の表現でもある彫刻の授業は、受講生の今後の実践しだいで、ベクトルを逆に向けて地域文化の活性化へと向かう可能性を備えているのであろう。

#### 4. 総括

筆者の制作（研究）のテーマは、自己の思いどおりにはならない物質や他者の〈他者性〉といかに向き合うか、ということである。本授業の到達目標②での自身のイメージを超えた抽象形態の発見は、筆者のこの制作テーマとつながっていると見えるだろう。アンケート結果が示すように、受講生の制作実践は、スタート時点で抱いたイメージを木によって再現するという、単純なものではない。「当初のイメージどおりに制作できた」と答えている受講生は1名のみであったことからもうかがえるように、おそらく木という物質の扱い難さを痛感したのではないだろうか。イメージを実現するための自己の延長としての木（素材）ではなく、思いどおりにならない木の〈他者性〉と向き合うことによって、自分のイメージとは異なる形や要素の発見が可能となるのである。

それ故、根気を必要とすることは当然であるが、授業計画の段階では、一つの作品に長時間をかけて制作することへの受講生からの不満も危惧していた。ところが、アンケート結果を見るかぎり、「単調で長く感じた」と答えた受講生は1名のみである。むしろほとんどの受講生は、一つの作品にじっくり時間をかけて取り組むことに、意義を見出していたのではないかとさえ思われる。

授業目的・到達目標については、概ね達成できたと考えられる。だが、到達目標①の自身の彫刻観の構築については、本来、完成ということはありませんので、これからも継続的に検討して深化することが課題であろう。本授業は基礎考察という性質があることから、関連するDPは、その基礎の部分においてのみ

達成することができたと考えられ、学校現場や地域社会への活用は、まだスタート地点に立ったばかりであると言えよう。

また、危険を伴うという彫刻制作の性質から、さらなる工具の安全指導の強化と環境整備の充実が必須である。一方、彫刻は制作実践のみではなく、その表現と創造につながるそれぞれの主体性が重要である。それが保障されるためには、受講生が能動的な好奇心を発揮することができ、その先に主体的な表現と創造の意欲が現れる契機としての、大学生生活での自由時間の確保が最も基本であろう。